

『国富論』第1篇第5章での異時点間価値比較のための尺度

中 川 栄 治*

1. 序

アダム・スミスは『国富論』(Smith (1976; 1776), 以下, WN と略記) 第1篇第5章の第1段落から第3段落で, 「商業的社会」での真の価値尺度としての支配労働という考えを提示した¹⁾。第4段落で支配労働尺度を使用する際の問題点として異質労働の問題に言及し, 第5-第6段落で現実におけるより簡明な尺度としての, 特定商品さらに貨幣ということに言及した²⁾。そして, それらの箇所では論じられる価値の測定は, 事実上, ある所与の時と場所における価値の測定であった。

だが, スミスは, 続く第7段落の冒頭で, 「けれども金銀は, すべての他の商品と同じようにその価値が変動し, 安価なこともあれば高価なこともあり, 購買が容易なこともあれば困難なこともある」(WN I.v.7/大河内訳 I, 57頁) と述べつつ, 異時点間価値比較を可能にする尺度を論じようとする。スミスは事実上, ある所与の時点における商品価値を測定するだけでなく商品価値の異時点間比較を可能にする価値尺度のことを考えようとしているのである。

支配労働尺度による異時点間の価値比較となると, 問題は複雑になる。

スミスの場合, 対象物の交換価値は, その対象物の所有がもたらす他の財貨に対する購買力である (WN I.iv.13/大河内訳 I, 49-50頁)。労働の生産力・労働生産性が経時的に上昇すれば, 生産力としての一定量の労働はより多くの

量の労働生産物を生産し, 一定量の労働支配力はより多くの量の労働生産物の支配を意味することになる。また, 生産物量の増加が支配労働量の増加と一対一の関係にあるためには, 労働1単位当たり実質賃金, 実質賃金率が経時的に一定でなければならない。

スミスは, 第5章第7段落から第22段落で, 事実上そのような問題を抱える異時点間価値比較を可能にする尺度, ということに関する議論を展開することとなる³⁾。

本稿は, その第5章でのいわゆる不変の価値尺に関するスミスの所論を検討しようとするものである。

2. 一時点における価値の測定と異時点間における価値の測定

『国富論』第1篇は, 「労働の生産力における改良の原因と, その生産物が国民の様々な階級の間に自然に分配される秩序について」(第1篇の表題) 論じる。前者の部分(生産)は分業によって説明され, それから後者の部分(分配)への移行は, 文明社会に富裕をもたらす分業, それを支える交換, とりわけ商品生産者間の社会的分業を支える交換, といった脈絡で, 交換の論理の提示を経由してなされる。スミスは, その交換の論理を, 諸商品の交換価値を規制(regulate)する原理(principles)の究明を通じて提示しようとする。その際スミスは事実上, 人々が財貨を貨幣と交換したり, また, 財貨を相互に交換したりする際に, 自然にまもる原則(rules)が, 財貨の交換価値(exchangeable value)(相対価値 relative value)を決定(deter-

* 広島経済大学名誉教授

mine) するとみて、その原則を検討しようとする。スミスは、財貨の交換価値（相対価値）の決定の検討という問題を、財貨と貨幣との交換また財貨と財貨との交換に際して人々が自然にまもる原則の検討として捉えるのである。そしてスミスは、いわゆる「価値のパラドックス」（水とダイヤモンド）を例にあげ、「ある特定の対象物の効用」としての「使用価値」と、「その対象物の所有がもたらす他の財貨に対する購買力」としての「交換価値（value in exchange）」とを区別したうえで、諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために、まず、この交換価値（exchangeable value）の真の尺度（real measure）は何かを示し、次いで、商品価格の構成部分を明らかにし、そして、商品の自然価格と市場価格を論じようとする（WN Liv.12-17／大河内訳 I, 49-50頁）。

スミスは、まず、諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために、交換価値の真の尺度は何かという問題を取り扱い、現実におけるより簡明な尺度が貨幣であることを認めつつも、その真の尺度を、商品が支配しうる生きた労働の量とする。

様々な種類の商品の交換価値をある共通の尺度で把握することによって、相互に比較可能なものにして、諸商品の交換価値を規制する原理を究明する、という発想自体は論理的なものでありうる。この問題自体は、いわゆるニュメールの問題に相当する側面を持つものである。

ただし、スミスの場合の真の価値尺度は、現代の経済学におけるニュメールのような任意の一商品ではなく、支配労働量であり、その尺度によって、分業・交換社会としての「商業的社会」での諸商品の諸「真実価格」の大きさを測定・把握が可能となる、と考えられているのである。スミスの場合、この支配労働尺度は、分業・交換社会としての「商業的社会」において、支配しうる生産力として、当該対象物の所

有がもたらす他の財貨に対する購買力としての対象物の交換価値の大きさの把握を可能にするものであり、「労苦と骨折り」という側面から「商業的社会」の構成員からの理解を得ることの可能なものであり、富が直接的には、市民的・軍事的な政治権力獲得とではなく市場にある労働に対する支配力と結びつくスミスの眼前の「商業的社会」での、交換価値の真の尺度を提供するものなのである。スミスは、彼のいう支配労働尺度は、そのようなものとして諸商品の交換価値を規制する原理を究明するための用具を提供する、と考えるのである。

だが、スミスの場合、本稿1で触れたように、価値尺度は、事実上、ある所与の時と場所における諸商品の交換価値を規制する原理を究明するための用具としてだけでなく、商品価値の異時点間比較をも可能にする尺度としても構想しようとしているのであった。

では、スミスの場合、価値の異時点間比較を可能にする尺度の論理的必要性はどのようなものであるのか。

この問題を考えるうえでの一つの手掛かりとなるのは、第5章第7段落中の、「人間の足の大きさとか、一尋の長さとか、一握りの量とか、というようなそれ自身の量が絶えず変動する量の尺度は、決して他の物の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように、それ自身の価値が絶えず変動するような商品も、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、決してなりえない」（WN I.v.7／大河内訳 I, 57頁）というスミスの文言である。すなわち、その論理からすれば、例えば商品Aの価値（交換価値）の大きさを商品Bの量で表示して、その価値が異時点間で上昇（下落）した時、もし商品Bの価値が経時的に不変なものであれば、その上昇（下落）およびその程度は、商品Aの価値の上昇（下落）およびその程度を正確に反映しうる、ということになるのである。それ自体の価値が経時的に

不変な尺度を使用して諸商品の価値の騰落とその程度を確定することができる、とスミスは考えるのである⁴⁾。スミスは、一つにはこのような理由から、それ自体の価値が不変な尺度が必要と考えるのである。

3. 労働の価値の不変性

スミスは、金銀・貨幣の価値は経時的な変動をこうむることを指摘したうえで、労働の価値の経時的不変性を主張しようとする。

「①等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとって等しい価値を持つものといえることができよう。彼の健康、体力、精神が普通の状態、また彼の熟練と技能が通常の程度であれば、彼は常に、自分の安楽 (ease)、自由 (liberty)、幸福 (happiness) の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価 (price) は、それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、常に同一であるにちがいない。②なるほど、その労働は、より大きな分量のそれらの財貨を購買することもあれば、より小さい分量のそれらの財貨を購買することもある。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。③時と場所のいかんを問わず、得難いもの、すなわち、獲得するのに多くの労働が費やされる (cost) ものは、高価 (dear) であり、また、容易に入手できるもの、すなわち、僅かな労働で入手できるものは、安価 (cheap) である。④それゆえ、それ自身の価値が決して変動することのない労働だけが、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準 (standard) である。労働はすべての商品の真実価格 (real price) であり、貨幣はその名目価格であるにすぎないのである」(WN I.v.7/大河内訳 I, 57-58頁。この引用文中の番号は中川) というのである。

①では、真の価値尺度を支配労働と考えるスミスは、異質労働の問題を考慮して、普通の状態にある通常程度の熟練・技能を備えた労働者による労働の一定量を考え、そして、労働の価値不変を、そのような一定量の労働を行う際の、労働者の払う安楽・自由・幸福の犠牲の不変性とみる。その意味での労働の価値は、労働と財貨との交換率にかかわらず（実質賃金率にかかわらず）不変とみる。そしてスミスは事実上、この労働の価値不変という認識は労働者の立場に立ったときに得られるものであるが、この認識は商業的社会的構成員には共有可能なもの、とみている。

②では、スミスは、労働と財貨の交換率（実質賃金率）は変化しうるが、そこでは労働の価値は不変で、交換率の変動は、財貨の価値の変動によるもの、とするのである。

③では、スミスは、人間と自然の交換関係を考えているのではなく、労働と財貨との交換関係を考えているのであり、獲得するために多くの労働を交換に供しなければならない財貨は高価で、獲得するために僅かな労働を交換に供するだけでよい財貨は安価、とみているのである。

④では、スミスは、上のような事情から、時と場所のいかんを問わず、すべての商品の真実価値（真実価格）の大きさおよびその変動は、商品がそれと交換に獲得しうる労働量、支配労働量の大きさおよびその変動によって表示されることになり、商品がそれと交換に獲得しうる貨幣の量で示されるのは、商品の名目価格ということになる、とみるのである。

4. 労働の価値の変動性：雇い主の視点から

スミスは、上のように、労働者の視点からすれば、労働の価値は不変的とするのであるが、他方で、雇い主の視点からすれば、労働の価値は可変的ともする。

「しかしながら、等量の労働は、労働者にとっては常に等しい価値を持つものではあるが、労働者を雇用 (employ) する者にとっては、より大きな価値を持つようにみえることもあれば、より小さい価値を持つようにみえることもある。彼は等量の労働を、ある時にはより多量の、またある時にはより少量の財貨で買うことがあるのであって、彼にとっては、労働の価格は、他のすべての物の価格と同じように変動するかのように見える。労働の価格は、前者の場合には彼にとって高価にみえ、後者の場合には安価にみえる。けれども実は、財貨が、前者の場合に安価で、後者の場合に高価なのである」(WN I.v.8/大河内訳 I, 58頁)。「それゆえ、こうした世間一般に流布している意味で (in this popular sense), 労働は、諸商品と同様、真実価格と名目価格を持つとよいであろう。労働の真実価格は、労働と交換に与えられる生活の必需品と便益品の量にあり、労働の名目価格は、労働と交換に与えられる貨幣の量にあるとよいであろう。労働者が富んでいるか貧しいか、労働者がよい報酬を得ているかわるい報酬を得ているかは、彼の労働の真実価格に比例しているのであって、彼の労働の名目価格に比例しているのではない」(WN I.v.9/大河内訳 I, 58頁)。

スミスの議論では、事実上、労働の量で表示された「真実価格」が、真実価値、真実交換価値にあたるものを意味し、貨幣の量で表示された「名目価格」が、名目価値、名目交換価値にあたるものを意味している、とみることもできるわけであるが、スミスはここでは、世間一般でいう意味での「真実価格」(雇い主の視点からの「真実価格」ということに言及するのである。そして、ここでは、商品および労働の「真実価格」は、労働の量で表示された他の諸商品に対する購買力としての「真実価格」というよりも、むしろ、直接的に、他の諸商品に対

する購買力としての「真実価格」と捉えられ、商品については今日でいう実質価格、労働については今日でいう実質賃金率にあたるものが考えられているのである。

また、スミスは事実上、このような労働の価値の可変性という認識は雇い主の視点に立った時に得られるものであるが、この認識は商業的社会的構成員には共有可能なもの、とみているのである。

5. 真実価格と名目価格の区別が持つ実際的有用性の例：穀物地代と貨幣地代

スミスは、上のような形で、労働者の視点からの労働の価値と雇い主の視点からの労働の価値(世間一般に流布している意味での価値)に言及するのであるが、そこに何らかの理論上の問題があるとはみていなかったようである。スミスは、その言及の後、直ちに、「諸商品と労働の、真実価格と名目価格との区別は、単なる思索の問題ではなくて、時には実際上かなり有用な問題でありうる」と述べ、「同一の真実価格は常に同一の価値を持つ、しかし金銀の価値の変動のゆえに、同一の名目価格は時として、非常に違った価値を持つ」(つまり、スミスのいう意味での同一の真実価格を持つ事物は、常に同一の支配労働量表示での財貨の量に対する購買力を持ち、世間一般に流布している意味での・世間一般でいう意味での同一の真実価格を持つ事物は、常に同一の財貨購買力を持つ、しかし、同一の名目価格を持つ事物は、貨幣価値の変動、貨幣の側での変動のために、時として、非常に違った支配労働量表示での財貨の量に対する購買力、あるいは単に、非常に違った財貨購買力を持つことになる)として(WN I.v.10/大河内訳 I, 59頁)、そのような実際的有用性の例をあげようとするのである。

5.1 穀物地代と貨幣地代

スミスはまず、長い期間における穀物地代と貨幣地代を比較して次のような見方を示す。

すなわち、一定額の貨幣で納めることになっている地代（貨幣地代）に比べ、一定量の穀物で納めることになっている地代（穀物地代）のほうが、その価値をよく保持してきた、といったことを示し、地代受領者にとっての穀物地代の有利性という事例をあげる。貨幣の財貨購買力が低下傾向にあったのに対し、穀物の財貨購買力は相対的に安定していた。それゆえ、一定額の貨幣で納めることになっている地代の財貨購買力が低下傾向にあったのに対し、一定量の穀物で納めることになっている地代の財貨購買力のほうは相対的に安定していた、というわけである。なお、そこでスミスが貨幣価値低下の原因としてあげるものは、一方での君主（princes）や独立国家（sovereign states）による鑄貨に含まれる純金属の量の削減（また、鑄貨の使用に伴う摩滅・損耗）、他方での、アメリカの諸鉱山の発見によるヨーロッパにおける金銀価値低下である（WN I.v.10-14, 40-41／大河内訳 I, 59-61, 77-78頁）。

ここでは、事実上、価値は、財貨購買力としての真実交換価値、真実価格（世間一般でいうのと同じの意味での真実価格）が考えられているといえる。

5.2 穀物地代と他の何らかの財貨で納められる地代

上のように、スミスは事実上、労働の量で表示された他の諸商品に対する購買力というよりも、むしろ、直接的に、他の諸商品に対する購買力としての世間一般でいう意味での「真実価格」という点から、穀物は貨幣よりも価値が安定的とするわけであるが、続いて、スミスはまた、労働の量で表示された価値としての穀物価値に言及する。

穀物は労働者の生活資料（the subsistence of the labourer）である。遠く隔たった時点では（at distant times）、等量の穀物は、等量の金銀また多分、等量の他のどのような商品よりも、より等量に近い労働を支配する。それゆえ、遠く隔たった時点では、等量の穀物の所有者のほうが、他の人々のより等量に近い労働を購買・支配できるのであって、その意味で、等量の穀物のほうが、より同一に近い価値を持つ。ただし、労働者の生活資料（その意味での労働の真実価格）そのものは、例えば、富裕（opulence）に向かって進歩している社会におけるほうが、停滞している社会におけるよりも豊かであり、停滞している社会におけるほうが、衰退している社会におけるよりも豊かであるといったように、等量の穀物ですら、正確に常に等量の労働を購買・支配するというわけではない。だが、どの特定時点でも、他のあらゆる商品が購買しうる労働量の大小は、当該商品がその時点で購買しうる生活資料の量の大小に比例する。したがって、穀物地代の真実価値（真実交換価値）は、地代として納められる一定量の穀物が支配しうる労働量の変動から影響を受ける。それに対し、他の何らかの商品で納められる地代の真実価値（真実交換価値）の場合には、一定量の穀物が支配しうる労働量の変動からだけでなく、地代として納められる一定量の当該商品が支配しうる穀物量の変動からも影響を受ける。穀物地代の場合、 $(\text{地代として納められる一定量の穀物}) / (\text{穀物賃金率}) = \text{当該地代の支配労働量}$ 。それに対し、他の何らかの商品で納められる地代の場合、まず、 $(\text{当該商品価格}) \times (\text{地代として納められる当該商品の量}) / (\text{穀物価格})$ によって、穀物量で示された当該地代の大きさが得られ、そのうえで、 $(\text{穀物量で示された当該地代の大きさ}) / (\text{穀物賃金率})$ によって、当該地代の支配労働量が得られる、というわけである（WN I.v.15／大河内訳 I, 61-62頁）。

前でも見た世間一般でいう意味での「真実価格」と関連させて捉えたとすれば、上の議論は次のようなものとして捉えることができる。

もし穀物1単位当たり他商品に対する購買力が、貨幣1単位当たり他商品に対する購買力よりも安定的であれば、一定量の穀物で納められることになっている地代（穀物地代）の他商品に対する購買力は、貨幣地代の他商品に対する購買力よりも安定的で、世間一般でいう意味での「真実価格」という点で、穀物地代の真実価格は貨幣地代の真実価格よりも安定的ということになる。一定量の他の何らかの商品で納められる地代についても、当該商品1単位当たり他商品に対する購買力が、貨幣1単位当たり他商品に対する購買力よりも安定的であれば、当該商品の一定量の形で納められる地代の真実価格は貨幣地代の真実価格よりも安定的ということになる。他方、穀物地代の真実（交換）価値（支配労働の量で示された価値）と他の何らかの商品で納められる地代の真実（交換）価値とを比べるとすれば、上のような事情から、前者は、地代として納められる一定量の穀物が支配しうる労働量の変動から影響を受ける。それに対し、後者は、一定量の穀物が支配しうる労働量の変動からだけでなく、地代として納められる一定量の当該商品が支配しうる穀物量の変動からも影響を受ける、というわけである。

6. 長期において価値の安定的な穀物と短期において価値の安定的な貨幣

スミスは、上のような形で、諸商品と労働の、真実価格と名目価格との区別の実際有用性の例を示そうとし、遠く隔たった時点間での、穀物の他財貨に対する購買力の相対的安定性および穀物の労働支配力の相対的安定性（逆にいえば、穀物量で示された賃金率の相対的安定性）ということから、遠く隔たった時点間での穀物地代価値の相対的安定性という考えを示すので

あるが、スミスはまた、事実上、長期における穀物価値の相対的安定性と、短期における、穀物価値の相対的不安定性および貨幣価値の相対的安定性を指摘しようとする（なお、ここでいう長期と短期は、現代経済学における、すべての生産費用が可変費用からなるものとしての長期、生産費用が固定費用と可変費用からなるものとしての短期といったものではなく、時間としての長期と短期であり、例えば世紀から世紀にかけての期間といった遠く隔たった時点間としての長期、また、年々、長くとも半世紀あるいは1世紀といった相対的に短い時点間としての短期である。例えばWN I.v.16/大河内訳I, 62頁を見よ）。そして、その論理は事実上次のようなものといえる。

世紀から世紀にかけては穀物地代の真実価値の変動は、貨幣地代の真実価値の変動よりもはるかに少ないが、年から年にかけては、穀物地代の真実価値は、貨幣地代の真実価値よりもはるかに大きく変動する。労働の貨幣価格（貨幣賃金率）は、穀物（生活必需品）の、一時的あるいはその時々価格（temporary or occasional price）ではなく平均価格あるいは通常価格（average or ordinary price）に対応している。穀物の平均価格あるいは通常価格は、銀の価値によって規制（regulate）される（つまり、穀物の平均貨幣価格・通常貨幣価格であるから、少なくとも短期の当該期間内では安定的な価格であり、それに変動がとすれば、その変動は貨幣価値の変動によるもの、とみることができ）。そして、銀の価値は、年々、また半世紀あるいは1世紀については（短期については）安定的である。それゆえ、穀物の平均貨幣価格（通常貨幣価格）は短期については安定的である。また、他の点で社会が同一状態にある限り、労働の貨幣価格（貨幣賃金率）も安定的ということになる。その期間中、穀物の一時的あるいはその時々価格の貨幣価格は、年々にかけて2倍になっ

たりすることがある。その時には、穀物地代の名目価値（貨幣量で示された穀物地代）は2倍になる。同時に、穀物地代の真実価値も2倍になる。すなわち、穀物地代の労働支配力——（2倍の穀物の一時的あるいはその時々々の貨幣価格×地代としての一定穀物量）／（安定的貨幣賃金率）——は2倍になる。また、他のほとんどの商品の貨幣価格がその間に変化なしとすれば、商品支配力としての真実価値も2倍ということになる、というわけである⁵⁾。また、この議論をうけてスミスは、労働がいついかなるところでも諸商品の価値を比較することのできる唯一の標準という意味で、唯一の正確かつ普遍的な価値尺度とするとともに、長期では穀物は銀よりも正確な価値尺度、短期では銀は穀物よりも正確な価値尺度とする。そして穀物と銀をそのようなものとみる根拠を、長期における穀物の労働支配力の相対的安定性、短期における銀の労働支配力の相対的安定性に求めるのである（WN Lv.15-17／大河内訳I, 61-63頁）。

7. 日常的業務での関心事としての貨幣価格、および、スミスの関心事としての真実価値の異時点間比較

スミスは、事実上同一時点における商品価値の表示の問題を扱う第5章第1-第6段落中の第5-第6段落で、大多数の人々にとっては、労働の量は、抽象的な観念であって自然で明白なものではないため、商品価値を、当該商品と交換される特定商品の量によって測るほうが分かりやすく、さらに、貨幣が商業の共通の用具になると、商品の交換は、貨幣を媒介として行われるようになり、そこでは、商品価値を、当該商品と交換される貨幣の量によって測るほうが、より自然で明白なこととなる、という考えを提示する。しかし、本稿1でみたように、スミスは、続く第7段落の冒頭で、金銀（貨幣）価値の経時的変動を指摘して、以上でみてきた

ような、価値の異時点間比較を可能にする価値の不変な尺度に関する議論を展開してきたわけであるが、以上の議論に続けて、スミスはまた、永代地代の設定や長期の借地契約の締結に際しては真実価格と名目価格の区別は有用であるとしても、売買といった普通の、通常取引に際してはそうとはいえない、ともする。すなわち、同一の時と場所では、一定額の貨幣は一定量の労働支配力を意味し、商品の真実価格と名目価格は正確に比例する。離れた場所の場合は商品の真実価格と名目価格の間には正確な比例関係はないが、商人たちの関心事は、財貨を仕入れる際の銀の量とその財貨の販売で得られる銀の量との差である。価格が関わる日常的業務を規制するものは、財貨の真実価格というよりも名目価格なのである、というわけである（第18-第21段落）。

そしてスミスは、上のような認識を示したうえで、また、「本書のような著作で、ある特定の商品の、様々な時と場所における様々な真実価値を比較すること、言い換えると、ある特定の商品が、様々な場合にそれを所有する人たちに与える、他の人々の労働を支配する力の様々な程度を比較することは、時には有用なことであろう」とする。スミスは、そのような比較は、その商品の支配しうる銀の量（貨幣価格）の比較によってではなく、その商品の支配しうる労働の量の比較によってなされるべきである、とするのであるが、同時に、離れた時と場所について支配労働量算出に必要な労働の時価（current prices of labour）に関する正確な情報入手の困難性を指摘する。そしてこの問題への対処法として、商品が支配しうる穀物量を使用して比較する方法を提起する。その根拠は、穀物の時価は一般に労働の時価よりもよく知られているということ、そして、普通入手できるものの中では、穀物の時価は、労働の時価と最も同一に近い割合を維持しうる、ということであ

る（当該商品の貨幣価格を穀物価格で割って当該商品の支配しうる穀物量を得れば、その穀物量は、当該商品の貨幣価格を貨幣賃金率で割って得られる当該商品の支配しうる労働量と最も安定的な割合を維持しうる。その穀物量は、支配労働量の指標となりうる）。そしてスミスは、この問題に関しては、「私は後で、この種の比較を幾つか試みることにしたい」と述べ、事実上、第5章での異時点間比較を可能にする尺度に関する議論を終える（第22段落）⁶⁾。

以上が、筆者の理解する、第5章第7段落から第22段階に示される異時点間価値比較のための尺度に関するスミスの議論の内容である。

以下では、そのようなものとしてのスミスの議論に関連して、幾つかの点で検討をくわえることとする。

8. 労働者の視点からの「真実価格」という把握の導入

スミスは、労働よりも貨幣を現実におけるより簡明な尺度と認めつつも、金銀・貨幣の価値は経時的な変動をこうむるということから、それは価値の異時点間比較を可能にする尺度とはなりえないとし、そして、労働することの意味する安楽・自由・幸福の犠牲は経時的に不変で、その意味で労働の価値は経時的に不変であり、労働（支配労働）は、価値の異時点間比較を可能にする尺度でありうる、と主張しようとする。

スミスの議論における真の価値尺度としての「労働」、「投入された労働」、「支配される労働」ということを巡って、また、真の価値尺度を「労働」、「投入された労働」、「支配される労働」とする際の論理・根拠ということを巡って、これまで、多くの研究で多様な見解が提示されてきた⁷⁾。

筆者は、一時点における価値比較を可能にする尺度についても、異時点間における価値比較を可能にする尺度についても、スミスは支配労

働尺度を考えていたとみる。また、その根拠となっていたものは、前者については、対象物の所有がもたらす他の財貨に対する購買力としての当該対象物の交換価値の大きさは、分業・交換社会としての「商業的社会」においては、支配しうる生産力としての他人の労働に対する支配力によって把握しうる（また、その論理は労働に伴う「労苦と骨折り」という側面から「商業的社会」の構成員からの理解を獲得しうる）ということであり、後者については、労働することが意味する安楽・自由・幸福の犠牲の経時的不変性、その意味での労働の価値の経時的不変性ということであった、とみる。

そしてスミスは、労働者の視点からの労働の価値と雇い主の視点からの労働の価値に言及しつつ、異時点間価値比較に関する議論を展開するのであるが、そこでのスミスの議論の特徴の一つは、そこに何らかの理論上の問題があるとはみていないということである。

しかし、雇い主の視点からの「真実価格」と労働者の視点からの「真実価格」という把握そのものは、価値尺度に関するスミスの議論にとって大きな影響を及ぼすものであるはずである。

スミスの場合、商品の交換価値は、当該商品の他財貨に対する購買力であり（第4章）、商品の真実交換価値は、支配労働量で表示された他財貨に対する購買力であった（第5章第1段落）。したがって、商品としての労働の交換価値も、当該労働の他財貨に対する購買力であるはず、スミスのいう雇い主にとっての労働の価値であるはずである。労働者にとっての労働の価値と雇い主にとっての労働の価値という見方は、交換価値についてのスミスのもともとの考えと相容れないものといえる。スミスもこの点に気付いていたと思える。スミスは、雇い主の視点からの労働の価値としての労働の「真実価格」を、世間一般に流布している意味での（世間一

般でいう意味での) 労働の「真実価格」としつつも、その有用性を認めるのである。

では、何故、スミスは、安楽・自由・幸福の犠牲をあげることによって、労働の価値不変を主張しようとしたのか。

スミスは、価値の異時点間比較を考える際、物価指数といったことを考えない⁸⁾。そして、財貨購買力としての労働の価値、その意味での実質賃金率の異時点間での変化の可能性を認めるスミスは、それでもなお、支配労働尺度を、異時点間比較でも妥当する尺度として主張するために、安楽・自由・幸福の犠牲の不変性に訴えることを選んだのであろう。

その論理は次のようなものと推測される。すなわち、『道徳感情論』(Smith (1976; 1759), 以下, TMS と略記)によれば人間の幸福は、心の平安であり⁹⁾、労働することが意味するのは、安楽・自由・幸福の犠牲である。「商業的社会」での労働者に労働を安定的に供給させる条件は、犠牲に見合う報酬ということになるが、1単位の労働が意味する安楽・自由・幸福の犠牲自体は経時的に不変である。スミスは、この事情を、労働の交換価値経時的に不変を意味するものと捉えようとする。そして、事物が支配しうる労働量で表示されるものとしての事物の真実交換価値の大きさが経時的に増加(減少)した場合、それは、当該事物の真実交換価値が経時的に増加(減少)したことを示す、と考えようとしたというわけである¹⁰⁾。

実質賃金率は異時点間で変化しうる、しかし、その実質賃金率の支払い対象となる労働の安楽・自由・幸福の犠牲自体は経時的に不変であり、そのようなものとしての労働に対する支配力の大きさが、事物の真実交換価値の大きさを究極的に指し示すというのが、スミスのいいたいところと筆者は理解する。

9. 支配しうる物量と支配しうる労働量：富と価値

リカードとマルサスは、『国富論』第1篇5章第1段落冒頭の「人が富んでいたり貧しかったりするのは、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる」というスミスの文言(WN Lv.1/大河内訳 I, 52頁)を「富」の内容を指すものと捉え、一方のリカードは、価値は富(riches)とは本質的に異なる——価値は生産の難易に依存するのであって、豊富ということに依存するのではない——とする。そして、他方のマルサスは、もし、前述の事物が自然に豊富に存在する際には、交換価値を持つものを所有しなくても豊かでありうるのであって、そこでは、富(wealth)は交換価値となんの関係もないということになるが、現実の状態では、富と交換価値は同じものではないとしても、近い関係にありうる、とする。なお、リカードは、商品、その交換価値、その相対価格を規制する法則を論じる際、人間の勤労の行使によって分量を増加させることができ、またその生産には際限なく競争の行われるような商品のみを考える、とする¹¹⁾。

スミスの場合には、「国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを本来的(originaly)に供給する源(fund)であって、この必需品と便益品は、つねに、労働の直接の生産物であるか、またはその生産物によって他の国民から購入したものであり」(WN [I].1/大河内訳 I, 1頁)、生活の必需品と便益品(および娯楽品)は、基本的に、労働の生産物である¹²⁾。そして、「富」は、「人間生活の必需品、便益品および娯楽品」であり、富の大きさ・富裕の程度は、それら必需品、便益品および娯楽品の物量である(WN Lv.1/大河内訳 I, 52頁)。また、「ある特定の対象物の交換価値」は、「その対象物の所有がもたら

す他の財貨に対する購買力」である (WN I. iv.13/大河内訳 I, 49-50頁)。そしてスミスは、分業 (商品生産者間の社会的分業) が行きわたるようになったあとの社会——スミスが第4章冒頭で言及している「商業的社会」——での、他人の労働に対する支配力に応じての人の富裕の程度 (必需品・便益品・娯楽品を享受できる程度)、そのような社会での各商品の交換価値 (他財貨に対する購買力) が意味することという視点から、支配労働尺度という考えを提示する。分業・交換社会としての「商業的社会」において、商品の他商品に対する購買力が真に意味することという視点から、つまり、そのような社会では、商品の労働支配力が、当該商品の他商品に対する購買力を意味することになる、ということから、真の尺度としての支配労働尺度という考えを提示するのである (WN I.v.1/大河内訳 I, 52頁)。

スミスは、このような脈絡、論理のもとに提示した真の尺度としての支配労働尺度という考えを、異時点間比較にも機能しうる尺度と考えようとするのである。そしてスミスは、そこでは、一時点における価値の測定において直面することのなかった諸問題に出合うこととなる。

例えば、分業等により労働の生産力・労働生産性が経時的に上昇するなら、生産力としての一定量の労働はより多くの量の労働生産物を生産し、一定量の労働支配力はより多くの量の労働生産物の支配を意味することになるのであるが——労働生産性の上昇率 (低下率) が賃金率の上昇率 (低下率) に等しい時 (実質賃金率が経時的に一定の時) には、生産力としての労働に対する支配力の増加 (減少) は、安定的に、労働生産物に対する支配力の増加 (減少) を意味しうる——、事実上、第1段落から第6段落での尺度は、一時点における測定に関わるものであるから、この問題は回避できる。しかし、異時点間比較に関する上のスミスの議論には、

異時点間比較における財貨現物の物量と支配される労働量で示した財貨の量との関係という問題が生じてくる。すなわち、労働1単位当たりを支払われる財貨の物量・労働1単位当たりを支払われる生活の必需品と便益品の量 (実質賃金率) は、経時的に変化する。商品1単位が支配しうる労働量は、(商品の名目価格)/(名目賃金率) で算出される。例えば、実質賃金率が上昇した場合、当該商品1単位という物量は、より少量の労働を支配し、当該商品の真実交換価値 (「真実価格」) は経時的に低下したことになる。そこでは、当該商品1単位という物量と当該商品1単位が支配しうる労働量との間の一対一の関係は崩れ、支配しうる労働量は安定的に、支配しうる物量1単位を示さない。ある一定量の財貨についても、経時的な実質賃金率の上昇は、その財貨の一定量が支配しうる労働量の経時的減少の方向に作用し、支配しうる労働量は安定的に、支配しうる財貨の一定物量を示さない。そこでは、例えば生産物の物量自体が増加しても、その増加率よりも大きな実質賃金率上昇があった時には、支配しうる労働量で示した生産物の量は減少することとなり、支配しうる労働量の動きは、生産物の物量自体の動きを反映できないこととなる。

スミス自身は、金銀・貨幣の価値は経時的に変動するのに対し、1単位の労働に伴う安楽・自由・幸福の犠牲は経時的に不変という意味で労働の価値は不変であるとし、事物が支配しうる労働量で表示されるものとしての事物の真実交換価値の大きさが経時的に増加 (減少) した場合、それは、当該事物の真実交換価値が経時的に増加 (減少) したことを示す、と考えようとする。しかし、そこでは、事物の真実交換価値の経時的な増加 (減少) の内容は、支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の増加 (減少)、ということになる。

このような事情から、スミスの場合、事物の

「真実価格」（真実交換価値）は、事実上、次のような内容を持つこととなる：

A 当該事物が支配しうる財貨の物量そのもの（世間一般に流布している意味での真実価格）

B 当該事物が支配しうる労働量（スミスのいう意味での真実価格）

B-1 当該事物が支配しうる労働量で示した、当該事物の支配しうる財貨の物量

B-2 当該事物が支配しうる労働量で示した、当該事物の支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量

A と B との関係は、いわゆる「富と価値」の関係に近いものともいえよう。ただし、スミスの場合、「価値」にあたる B の方は、上のような二つの内容を持つこととなるのである。

10. 支配しうる財貨の物量、および、支配労働尺度で測定される支配しうる財貨の物量と支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量、そして、穀物

スミスは、1単位の労働に伴う安楽・自由・幸福の犠牲は経時的に不変で、その意味で労働の価値は不変である、ということを描き出すことによって、支配労働尺度は、一時点における価値の測定だけでなく異時点間における価値の測定にも適用しうる尺度であることを論証したと考えている。すなわち、労働に伴う一過性の「労苦と骨折り」でなく、労働に伴う「安楽、自由、幸福の犠牲」の経時的不変性をあげることによって、労働の価値の経時的不変性を説明できると考えているのである。

しかし、実際には、この議論によって、本稿9で触れたような、当該事物の支配しうる労働量が表示する二つの内容という問題が導入されることとなるのである。一つにはこのような事情から、スミスの価値尺度の測定対象ということ巡って、様々な見解が提示され、例えば、スミスの価値尺度の測定対象は事実上、「交換

価値」とは別のものとしての「価値」であったという見方も提示されてきた¹³⁾。

スミスは、第5章で、支配しうる財貨の量、および、支配労働尺度で測定される支配しうる財貨の物量と支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の関係等々といったことについて論じているわけではなく、一見、それらは脈絡のないまま放置されているようにもみえるが、他面で、第5章における、穀物地代、価値尺度としての穀物に関する議論に、それらを繋ぎ合わせる諸要素を見出すことができる。

まず、本稿5.1でみたように、第5章で長い期間における穀物地代と貨幣地代を比較する際、支配労働量で示された財貨購買力ではなく、物量としての財貨購買力のことが考えられ、長い期間では穀物の方が、物量としての財貨購買力（実質購買力）の点でより安定的、とされる。ここでは事実上、穀物の実質価格（財貨購買力）の安定性が考えられているのである。

次いで、5.2でみたように、穀物地代と他の何らかの商品で納められる地代を比較する際には、穀物と他の何らかの商品に関しては、穀物の物量と他商品の物量との関係で考えられている。他方でまた、穀物については、穀物と労働の関係すなわち穀物の労働支配力という脈絡でも考えられている。穀物は、一方で、物量としての他財貨に対する購買力の脈絡で考えられ（この意味で、穀物の実質購買力、穀物の実質価格は安定的）、他方で、労働に対する購買力（労働支配力）の脈絡で考えられているのである。

そして、本稿6でみたように、スミスが第5章で、長い期間において価値の安定的な穀物と短い期間において価値の安定的な貨幣を議論する際には、長い期間における穀物の労働支配力の相対的安定性（穀物賃金率の相対的安定性）、短い期間における銀の労働支配力の相対的安定性（貨幣賃金率の相対的安定性）の脈絡で考え

られ、また、労働の貨幣価格（貨幣賃金率）は、穀物（生活必需品）の、一時的あるいはその時々々の価格ではなく平均価格あるいは通常価格に対応している、と考えられている。

以上の点を考慮すれば、長い期間においては、穀物の、物量としての財貨購買力（穀物の実質購買力）、その意味での穀物の実質価格は安定的であり、穀物の労働支配力、穀物賃金率も安定的である。そこでは、(事物の貨幣価格) / (穀物価格) によって、その事物の支配穀物量を算出でき、そして、(事物の支配穀物量) / (穀物賃金率) によって、安定的に、その事物の支配労働量を算出できる。そして、穀物賃金率は安定的であるから、その支配労働量は、安定的に、支配労働量で表示された支配穀物量を反映でき、さらに、穀物の実質価格は安定的であるから、支配労働量で表示された他財貨に対する購買力を把握できる。同時に、その支配労働量によって、安定的に、その事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量を知ることができる。その事物の支配労働量に増加（減少）があった場合、それは、安定的に、支配労働量で表示された他財貨に対する購買力、および、その事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加（減少）を指し示し、その事物の交換価値の上昇（低下）を指し示すことになる。

また、例えば、(貨幣量で表示した集計としての生産物) / (穀物価格) によって、その生産物の支配穀物量を算出し、支配穀物量が増加（減少）した場合、穀物の実質価格は安定的であるために、支配穀物量の増加（減少）は安定的に生産物物量の増加（減少）を指し示し、(支配穀物量で表示した生産物) / (穀物賃金率) によって、その生産物の支配労働量を算出して、その生産物の支配労働量に増加（減少）があった場合、それは、安定的に、支配労働量で表示された他財貨に対する購買力、および、その生産物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量

の増加（減少）を指し示すことになる。

他方、短い期間では、(事物の貨幣価格) / (貨幣賃金率) において、分母の貨幣賃金率が安定的であるため、支配労働量の増加（減少）は、安定的に、その事物の支配労働量で表示した他財貨に対する購買力の増加（減少）を示すとともにその事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加（減少）を指し示し、当該事物の真実交換価値の上昇（低下）を指し示すことになる。また、(貨幣量で表示した集計としての生産物) / (貨幣賃金率) において、分母の貨幣賃金率が安定的であるため、支配労働量の増加（減少）は、安定的に、集計としての生産物物量の増加（減少）、および、支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加（減少）を指し示すことになるのである¹⁴⁾。

このようにスミスの議論中の諸要素を組立てれば、異時点間比較の尺度に関するその議論は、それなりの整合性を備えたものとなりうるわけである。

なお、本稿7で触れたように、スミスは、離れた時と場所について支配労働量算出に必要な労働の時価に関する正確な情報入手の困難性を指摘し、その問題への対処法として、穀物の時価は一般に労働の時価よりもよく知られており、そして、普通入手できるものの中では、穀物の時価は、労働の時価と最も同一に近い割合を維持しうるという理由から、「一般的には穀物の時価で満足しなければならない」としていた(WN I.v.22 / 大河内訳 I, 65-66頁)。しかし、スミスの議論を事実上ここでみたようなものとして捉えた場合には、穀物は近似的な、次善の価値尺度というよりも、むしろ、穀物の介在によって、異時点間比較のための価値尺度についての議論はそれなりの整合性を備えた一議論となりうるのである。

そして、そこで鍵となる前提は、長い期間における、穀物の実質価格の安定性および穀物賃

金率の安定性である。

第5章では、スミスは、穀物賃金率の安定性の根拠に触れている。しかし、穀物の実質価格の安定性の根拠に関する議論は示されず、それは前提されるにとどまっている。

そしてスミスは、第5章では、異時点間比較に関しては、「私は後で、この種の比較を幾つか試みることにしたい」と述べてその議論を終えようとするのである¹⁵⁾。

11. 結 論

スミスは、『国富論』第1篇第4章末で、他財貨に対する購買力としての交換価値を規制する原理を究明するために、まず、第5章で、交換価値の真の尺度は何かを明らかにすることを約束し、第5章で、その約束を果たすべく、分業・交換社会としての「商業的社会」での商品の交換価値を、支配しうる（生きた）労働の量で測定するという支配労働尺度の考えを提示した。諸商品の交換価値の大きさを支配労働尺度で把握することによって相互に比較可能なものにするという形で、商品の交換価値を規制する原理の究明のための用具を提示しようとした。その用具は、事実上、ある所与の時と場所における商品の交換価値を規制する原理を究明するための用具である。

しかし、スミスは事実上、彼の支配労働尺度にそのような機能を求めただけでなく、異時点間比較を可能にするという機能をも求めようとした。この問題が論じられるのが、第5章第7段落から第22段落であり、本稿で主に取り扱われたのは、そこでのスミスの議論である。

その議論でのスミスの基本的な考えは、それ自体の価値が不変な尺度を設定し、その尺度に照らして、諸商品の価値の騰落とその程度を把握するというものである。

そのような尺度を支配労働尺度に求めようとするスミスは、労働の価値の不変性を証明しよ

うとするのであるが、その証明を、異質労働の問題を考慮して、普通の状態にある通常程度の熟練・技能を備えた労働者による労働の一定量を考え、そして、労働の価値不変を、そのような一定量の労働を行う際の、労働者の払う安楽・自由・幸福の犠牲の不変性を根拠にしてなそうとした。

スミスが問題としようとした価値は、財貨に対する購買力としての交換価値であったはずであり、一定量の労働を行う際の労働者の払う安楽・自由・幸福の犠牲の不変性は、交換価値の尺度としての労働の価値の不変性を意味しうるのか。スミスもこの点には迷いがあったはずである。スミスは、等量の労働が、ある時にはより多量の、またある時にはより少量の財貨で買われることを認めるのである。そしてスミスは、この意味での労働の価値を、世間一般に流布している意味での価値としつつも、「諸商品と労働の、真実価格と名目価格との区別は、単なる思索の問題ではなくて、時には実際上かなり有用な問題でありうる」と述べ、事実上、スミスのいう意味での「真実価格」（真実価値・真実交換価値：支配しうる労働の量で示された価格）についても、世間一般に流布している意味での「真実価格」（支配しうる現物の量で示された価格）についても、それらの「名目価格」との区別は有用、とするのである。

事実上、所与の時と場所における商品の交換価値を問題とする支配労働尺度での労働は、財貨生産力としての労働であり、そこでの商品の「真実価格」（真実価値・真実交換価値）は、当該商品が支配しうる労働量で示した、当該商品の支配しうる財貨の物量であった。そして、交換価値の異時点間比較を問題とする支配労働尺度での労働は、安楽・自由・幸福の犠牲としての労働であり、そこでの商品の「真実価格」は、当該商品が支配しうる労働量で示した、当該商品の支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量、

ということになる。

スミスの場合、事物の「真実価格」（真実交換価値）には、事実上、当該事物が支配しうる財貨の物量そのものとしての「真実価格」（世間一般に流布している意味での真実価格）と当該事物が支配しうる労働量としての「真実価格」（スミスのいう意味での真実価格）とがあり、そして後者については、当該事物が支配しうる労働量で示した、当該事物の支配しうる財貨の物量としての「真実価格」と当該事物が支配しうる労働量で示した、当該事物の支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量としての「真実価格」とがあることとなる。

そして、異時点間では、1単位の労働に伴う安楽・自由・幸福の犠牲の量は不変であるが、1単位の労働に対して支払われる財貨の物量、つまり実質賃金率は可変的である。そこでは、当該事物が支配しうる労働量で示した、当該事物の支配しうる財貨の物量の動きは、当該事物が支配しうる財貨の物量の動きそのものを正確に反映することができないこととなる。

このような事情の中にあって、上の三つの「真実価格」をある程度論理整合的に繋ぐ役割を果たすのが穀物、ということになるのであった。

すなわち、第5章での議論においてスミスは、事実上、長期間では様々な商品のうちにあって穀物の財貨購買力が安定的（穀物の実質価格が安定的）ということ的前提する。

またスミスは事実上、様々な商品に対する購買力としての実質賃金率は可変的であることを認めるのであるが、穀物は労働者の生活資料であり、長期間では、様々な商品のうちにあって労働者の生活資料としての穀物の労働購買力は安定的（穀物賃金率は安定的：事実上、労働者の生活資料そのものは、富裕に向かって進歩している社会におけるほうが、停滞している社会におけるよりも豊かであり、停滞している社会

におけるほうが、衰退している社会におけるよりも豊かであるといったように、等量の穀物ですら、正確に常に等量の労働を購買・支配するというわけではないとしても、趨勢としては安定的）ということを前提する。

そしてそこでは、ある商品の、支配穀物量で表示した価格の上昇は、穀物の財貨購買力（穀物の実質価格）が安定的であるから、安定的に、当該商品の財貨購買力としての実質価格の上昇を指し示すことができる。また、ある商品の、支配穀物量で表示した価格の上昇は、穀物賃金率が安定的であるから、安定的に、当該商品の支配労働量の増加を指し示すことができる。そしてその支配労働量の増加は、一方で、当該商品の支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加を安定的に指し示すことができる。また他方で、その支配労働量の増加は、支配労働量で表示した支配穀物量の増加を反映し、穀物の実質価格が安定的であるから、安定的に、支配労働量で表示した当該商品の財貨購買力の増加を指し示すことができるということになる。

このようにみると、穀物はスミスのいうように近似的な次善の価値尺度というよりも、むしろ、穀物の介在によって、異時点間比較のための価値尺度についての議論はそれなりの整合性を備えた一議論となりうる、ということになる。

また、例えばカードウは、価値は富とは本質的に異なる——価値は生産の難易に依存するのであって、豊富ということに依存するのではない——として、富と価値ということを問題にする。そして、上のスミスの議論での、当該事物が支配しうる財貨の物量そのものとしての「真実価格」（世間一般に流布している意味での真実価格）と当該事物が支配しうる労働量としての「真実価格」（スミスのいう意味での真実価格）は、その富と価値に対応する要素を持つといえるが、穀物が介在することによって、スミスの議論における富と価値の混同等といった

富と価値に関連しての批判はある程度回避される、ということになる。

また、スミスの議論では、短い期間に関しては、穀物よりも貨幣のほうが、貨幣の財貨購買力および貨幣の労働購買力において相対的に安定的、ということから、長い期間において穀物が果たしうる役割を果たしうる、ということとなる。

他方、スミスは、事実上同一時点における商品価値の表示の問題を扱う部分では、大多数の人々にとっては、労働の量は、抽象的な観念であって自然で明白なものではないため、商品価値を、当該商品と交換される特定商品の量によって測るほうが分かりやすく、さらに、貨幣が商業の共通の用具になると、商品の交換は、貨幣を媒介として行われるようになり、そこでは、商品価値を、当該商品と交換される貨幣の量によって測るほうが、より自然で明白なこととなる、と考えていた。そして、価値の異時点間比較を扱うこの部分でも、上の議論に加えて、同一の時と場所では、一定額の貨幣は一定量の労働支配力を意味し、商品の真実価格と名目価格は正確に比例し、また、離れた場所の場合は商品の真実価格と名目価格との間には正確な比例関係はないが、商人たちの関心事は、財貨を仕入れる際の銀の量とその財貨の販売で得られる銀の量との差であり、価格が関わる日常的業務を規制するものそのものは、財貨の真実価格というよりも名目価格である、ともしする。

なお、スミスは、上のことを認めるとともに、また、「本書のような著作で、ある特定の商品の、様々な時と場所における様々な真実価値を比較すること、言い換えると、ある特定の商品が、様々な場合にそれを所有する人たちに与える、他の人々の労働を支配する力の様々な程度を比較することは、時には有用なことであろう」とする。スミスは、そのような真実価格と名目価格の区別の有用性の例として、永代地代の設

定や長期の借地契約の締結の例をあげるにとどめ、「私は後で、この種の比較を幾つか試みることにしたい」と述べ、事実上、第5章での異時点間比較を可能にする尺度に関する議論を終える。

本稿注6でも触れたように、スミスは、続く第23段落から第42段落で、現実の商業の用具、一般的な価値尺度としての貨幣との関連で、ローマ共和国→ローマ帝国以来スミスの時代に至る時期の鑄貨制度に関する議論を展開し、第5章「商品の真実価格と名目価格について、すなわち、商品の労働での価格と商品の貨幣での価格について」を終えようとするのである。

長い期間における、穀物の実質価格の安定性、また、真実価格と名目価格の区別の有用性のさらなる例等については、第5章を越えてスミスの議論をみておくことが必要、ということになる。

注

- 1) 中川 (2023) を見よ。
- 2) その概要については、中川 (2022)、19頁を見よ。なお、スミスは第4段落で、労働の質の相違のため複数労働量間の割合確定は個々の労働の時間だけでは困難という問題をあげ、それへの対処に関して、例えば次のように述べる。「辛さ (hardship) にせよ、巧妙さ (ingenuity) にせよ、その正確な尺度を見つけ出すのは容易なことではない。実際のところ、異なった種類の労働の様々な生産物を相互に交換するにあたっては、両方について、幾らかの斟酌がくわえられるのが普通である。といっても、それはある正確な尺度によってではなく、正確ではなくても日常生活の業務を処理していくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場の駆け引きや交渉 (the higgling and bargaining) によって調整されるのである」(WN I.v.4/大河内訳 I、55頁)。

そのスミスの文言は幾分曖昧な点を含むが、スミス価値尺度論における異質労働の問題については、多くの論者が論及してきた。それについては、中川 (2016)、第II部第6章を見よ。中川 (2016)での指示箇所から、中川 (2010)、中川 (1995a) および中川 (1995b)での関連箇所をたどれる。以下、同様。

なお、スミスは、第6章で、事実上、高度な技能と創意 (dexterity and ingenuity) を必要とする労働については、人々はそのような才能 (talent)

を高く評価 (esteem) し、また、そのような才能は多くの場合、長期にわたる勤勉 (application) の結果得られたものであるが、社会の進歩した状態 (the advanced state of society) では、より大なる辛さやより大なる熟練 (skill) に対する斟酌は、普通、労働の賃金のなかでなされるのであり、最初期で最未開の時期にも、恐らく、上と同種のなんらかのことがなされていたに違いない、といった見方を示している (WN I.vi.3/大河内訳 I, 80-82頁)。

上の見方は、第6章第3段落に示されるものである。第6章の第1段落から第4段落は、基本的に、資本蓄積と土地占有に先立つ「初期未開の社会状態」での交換価値の決定を扱うものであるが、筆者は、第3段落中の上の見方は、スミスの眼前の社会、社会の進歩した状態、「商業的社会」では、労働の質の相違そのものは賃金率格差に反映される、というのがスミスの考えであったことを示しているとする。

なお、スミスはまた、第10章第1節で、労働と資本 (stock) の諸用途間の賃金および利潤の不平等のうち、職業自体の性質から生じる不平等を論じる。そこでは、金銭的利得 (pecuniary gain) としての賃金は、①当該職業が不快なものであるほど、②当該職業の習得が困難で費用がかさむほど、③当該職業における雇用が不安定なほど、④当該職業の従事者に寄せられるべき社会的信頼度が高いほど、⑤当該職業での成功の見込みが厳しいものであるほど、高くなる、とされる。そして、自由な競争にくわえて、①長年営まれてきた基礎の確立した職業、②通常の状態・自然の状態にある職業、③従事者にとって唯一または主要な職業、といった条件を満たす職業間では、金銭的利得にくわえ他の諸要因を考慮に入れたる職業の利得は、全職業を通じて均等となる傾向を持つ、とされる (WN I.x.a,b/大河内訳 I, 165-97頁)。

- 3) 第5章第7段落から第22段落の概要については、中川 (2022), 19-21頁を見よ。
- 4) リカードウは、『経済学および課税の原理』第3版 (1821) において第1章に新設された第6節「不変の価値尺度について」の第一文で、「諸商品が相対価値において変動した場合には、実質価値 (real value : 真の価値) においてどちらの商品が下落しどちらの商品が騰貴したかを確かめる手段を持つことが望ましいであろう、そしてこのことは、これらの商品を、順次に、価値の、ある不変の標準尺度 (some invariable standard measure)、すなわち、それ自体は他の諸商品がこうむる変動を全く受けてはならない尺度と比較することによってのみ、果たされようであろう」と述べる。ただし、続けて、「このような尺度を持つことは不可能である……」ともする (Ricardo (1951; 1817), pp. 43-44/堀訳, 49頁)。
- 5) なお、スミスは第5章第7段落で、16世紀ヨーロッパにおける金銀の価値低下 (銀の労働支配力の低下) を、アメリカの豊富な鉱山の発見の結果、金銀を鉱山から市場にもたらすのに費やす (cost)

労働が減少したから、という形で説明しようとする。そして、スミスはここでは、穀物の平均価格あるいは通常価格は銀の価値によって規制される、とするのであるが、その際は、「後で明らかにしようと思うが」という言葉を付しつつ、穀物の平均価格あるいは通常価格は、銀の価値によって、その金属を市場に供給する諸鉱山の豊度の程度 (the richness or barrenness) によって、換言すれば (or)、ある特定量の銀を鉱山から市場にもたらすために使用 (employ) されなければならない労働の量、したがってまた消費されなければならない穀物の量によって規制される、とする。本文中のことを含め、以上については、WN I.v.16/大河内訳 I, 62-63頁を見よ。

スミスは第6章の冒頭で、「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態 (early and rude state of society) のもとにおいては、種々の物の獲得に必要な (necessary) 労働量の間の比率が、これらの物を相互に交換するにあたっての原則 (rule) を提供しうる唯一の事情 (the only circumstance) であると思われる」とし、そのことを、狩猟民族の間でのビーバーと鹿の交換を例に取り、説明しようとする (WN I.vi.1/大河内訳 I, 80頁)。

第5章の第7段落、第16段落では、スミスは「唯一の事情」にあたるような表現は示していない、ということに留意しておく必要がある。

銀の価値およびその変動に関するより立ち入った議論は、長い「余論」を含む第11章中で展開される。

なお、スミスは、例えば第2篇第2章中でも、市場にもたらすのに必要な労働量の比率が金銀の価値と他財貨の価値との割合を規定するとの旨の言及をなしている。WN II.ii.105/大河内訳 I, 513頁を見よ。

- 6) 以上については、中川 (2022), 19-21頁も見よ。なお、続く第23段落から第5章終わりの第42段落で、現実の商業の用具、一般的な価値尺度としての貨幣との関連で、ローマ共和国→ローマ帝国以来スミスの時代に至る時期の鋳貨制度に関する議論が展開される。その議論の過程でスミスが指摘している幾つかの留意点については、中川 (2022), 21-22, 30頁を見よ。
- 7) それらの見解の例については、中川 (2016), 第II部第4, 第5章を見よ。
- 8) シュムペーターは、当時すでに発明されていた指数方法を知らなかったスミスは貨幣に代わる「ニューメレール」として最終的には商品としての労働 (支配労働) を選び出した、という見方をとっていた。Schumpeter (1954), p. 188, incl. n. 19/邦訳, 第1分冊, 391-92頁, 393頁注19, 中川 (1995a), 187, 191頁を見よ。例えば, Schumpeter (1954), pp. 526, 701, incl. n. 7, p. 1089/邦訳, 第3分冊, 1105頁, 第4分冊, 1469-70頁, 1470-71頁注7, 第6分冊, 2292頁も見よ。
- 9) 例えば, TMS III.3.30, VII.ii.2.7, 11/高訳272-73, 547, 549頁を見よ。

10) スミスは、第5章の第2段落で、支配労働尺度の採択を支援する脈絡で、労働することの「労苦と骨折り」に言及する。それに対し、ここでは、労働の価値の不変性を主張する脈絡で、労働することが意味することとしての「安楽、自由、幸福」の犠牲という考えが示される。『道徳感情論』第1部第2篇の第1章および第2章に示される用語でいえば、労働することの「労苦と骨折り」は「身体に起源を持つ諸情念 (passions)」のうちに含まれ、労働に際しての「安楽、自由、幸福」の犠牲は、「想像力の特定の傾向または慣習に起源を持つ諸情念」に含まれるといえる。スミスの場合、後者の精神的なものに起源を持つ諸情念は、前者の肉体的なものに起源を持つ諸情念よりも、観察者からの同感を得やすく、またその同感はより持続する傾向を持つのである。スミスは、第2段落での「労苦と骨折り」という表現と、後の第7段落での「安楽、自由、幸福」の犠牲という表現とを使い分けているのである。

なお、例えば、ハチソンは、「一日分の採掘または一日分の耕作は、千年前も現在も、一人の人間にとっては同じように不快 (uneasy)」としていた (Hutcheson (2014; 1755), vol. 2, p. 58)。

11) Ricardo (1951; 1817), pp. 12, 273 / 邦訳, 14, 315頁。Malthus (1820), pp. 337-38 / 邦訳下, 141頁。Malthus (1974; 1836), p. 299. マルクスの場合は、富 (Reichtum) の素材的内容をなすのが使用価値であり (Marx (1974; 1867), Bd. 1, S. 50 / 邦訳, 第1巻第1分冊, 48-49頁), その意味で、富と価値の関係は、使用価値 (富) と価値ということになる。

スミスのいう「生活の必需品、便益品および娯楽品」を、マルサスは、「富 (wealth)」と呼び、それを「価値 (value)」と区別しようとし、リカードは「富 (riches)」と呼び、それを「価値 (value)」と区別しようとし、また、マルクスの場合には、使用価値と価値の統一体が商品であり、その使用価値が、富 (Reichtum) の社会的形態にかかわらず、富の物質的内容をなし、商品経済では使用価値は価値の担い手 (価値の現象形態・価値形態が交換価値), ということとなる (Malthus (1820), chap. 6. Malthus (1974; 1836), [bk. 1], chap. 6. Ricardo (1951; 1817), chap. 20. Marx (1974; 1867), Bd. 1, Abschn. 1, Kap. 1)。マルサスは「価値 (交換価値)」と「富 (wealth)」, リカードは「価値 (交換価値)」と「富 (riches)」といった見方をとり、マルクスは、「価値」と「使用価値」, そして「富 (Reichtum)」の物質的内容としての「使用価値」, といった見方をとるのである。例えば、後代の、ダナー、ブラウグが、「富」に言及する際には、マルサス、リカードと同様、それは価値 (交換価値) とは別物とみる。また、シロス・ラビーニは、「価値」と「富」との違いに符合する、「交換価値」と「使用価値」との違い・スミスの議論での「年々の生産物」の労働支配力と「年々の生産物」の物量との違い, といった見方をとる (Danner (1964; 1976), pp. 175-76,

192-93, 215, Blaug (1959), pp. 152-53, Sylos-Labini (1976), pp. 212-13, 213n. 13を見よ)。またそれに対し、カーリルは事実上、スミスの議論における、「価値 (交換価値)」と「富」といった視点よりもむしろ、「富」の交換価値と「富」の使用価値, といった視点から問題を捉える。そしてカーリルは、スミスの議論では事実上、富の使用価値は、所有する生産物・支配しうる生産物という尺度によって測定され、富の交換価値は、所有する生産物の支配労働という尺度によって測定されると考えられている (Khalil (1991), pp. 41-44を見よ)。なお、スミスの議論における富と価値の問題は、例えば2012年のメアッチの論文中でも扱われるのであるが、それについては、本稿での字数の制約という事情から、次稿中で触れることとする。

12) スミスは、例えば、「年々の生産物の全体は、大地の野生の産物を除けば、すべて生産的労働の成果である」としている (WN II.iii.3 / 大河内訳 I, 519頁)。

13) 測定対象を巡るそれらの見解の例については、例えば、中川 (2016), 第II部第1章を見よ。同書の補論IIも見よ。

14) なお、スミスは、他の所で、例えば、「あらゆる社会の労働によって年々採集または生産されるものの総体、または同じことになるが、この総体の全価格 (whole price)」(WN I.vi.17 / 大河内訳 I, 88頁), 「あらゆる国の土地と労働の年々の全生産物 (whole annual produce), または同じことだが、この年々の生産物の全価格」(WN I.xi.p.7 / 大河内訳 I, 402頁), 「その国の土地と労働の年々の生産物の交換価値 (exchangeable value), その国の全住民の真の富と収入 (wealth and revenue)」(WN II.iii.13 / 大河内訳 I, 528頁) 等々といった見方を示している。

15) なお、例えばオプライエンは、スミスが『国富論』第1篇第5章で実際に取り組もうとした問題は、労働者の生存費水準を決定すると彼が考える社会の変動する前進性に起因する、諸商品の労働支配力・労働不効用支配力 (真実価値) の経時的変動 (そこでの労働支配力の大きさそのものは、支配しうる「労働者の生存費」の単位数, 労働1単位当たり生存費をどれだけ多く支配できるか, によって測定されるもの) に関わる問題, および、悪劣や貴金属自体の価値の変動等といったことによるものとしての、他の諸商品に対する貨幣の支配力の変動 (その意味での「貨幣価値の変動」) に関わる問題, という二つの問題であったとみる。そして、スミスは、長期的には労働者の生存費は穀物の価格とともに変動する故、上の前者の変動は穀物デフレーターによって最も良好に対処することができ、また、穀物は貨幣よりも安定的なものである故、穀物デフレーターは、上の後者の変動に対処するのに一層良好なものと、考えようとした、とみつつ議論を展開する (それについては、O'Brien (1975), pp. 83-84, 107nn. 10-13, 中川 (2010), 481-82, 522-23頁, 612-13頁注226-

229を見よ。O'Brien (2004), pp. 96–98, 370nn. 10–13も見よ。

参 考 文 献

- 中川栄治 (1995a): 『「アダム・スミスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——』(上), 広島経済大学研究双書第14冊, 広島経済大学地域経済研究所。
- (1995b): 『「アダム・スミスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——』(下), 広島経済大学研究双書第15冊, 広島経済大学地域経済研究所。
- (2010): 『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——』(上), 晃洋書房。
- (2016): 『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——』(下), 晃洋書房。
- (2022): 『「国富論」第1篇第5章の構造』『広島経済大学経済研究論集』44(3), 17–34頁。
- (2023): 『「国富論」第1篇第5章冒頭三段落について——「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」の視点から——』『広島経済大学経済研究論集』45(3), 1–18頁。
- Blaug, M. (1959): 'Welfare Indices in *The Wealth of Nations*,' *Southern Economic Journal*, 26(2), pp. 150–53.
- Danner, P. L. (1964; 1976): *An Inquiry into the Social Aspects of Adam Smith's Theory of Value*, Ph. D. dissertation, Syracuse University, ©1965, Ann Arbor, Mich.: Xerox University Microfilms, 1976.
- Hutcheson, F. (2014; 1755), *A System of Moral Philosophy*, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, digitally printed version, 2014.
- Khalil, E. L. (1991): 'Adam Smith's Concept of Labor-Commanded: A Study in Misinterpretation,' *New York Economic Review*, 21(2), pp. 34–49.
- Malthus, T. R. (1820): *Principles of Political Economy, considered with a View to Their Practical Application*, London: John Murray. 小林時三郎訳『マルサス 経済学原理』(上・下), 岩波文庫, 1952年。
- (1974; 1836): *Principles of Political Economy, considered with a View to Their Practical Application*, 2nd ed., London: William Pickering, 1836; reprint ed., Clifton: Augustus M. Kelley.
- Marx, K. (1974; 1867): *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, Bd. 1 (hrsg.) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz Verlag. 大内兵衛・細川嘉六監訳『資本論』, 第1巻(全5分冊), 大月書店, 1968年。
- Meacci, F. (2012): 'On Adam Smith's Ambiguities on Value and Wealth,' *History of Political Economy*, 44(4), pp. 663–89.
- O'Brien, D. P. (1975): *The Classical Economists*, Oxford: Clarendon Press.
- (2004): *The Classical Economists Revisited*, Princeton: Princeton University Press.
- O'Donnell, R. (1990): *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke and London: Macmillan.
- Ricardo, D. (1951; 1817): *The Works and Correspondence of David Ricardo*, (ed.) P. Sraffa, vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, Cambridge: Cambridge University Press. P. スラッファ編『デイヴィッド・リカード全集』I: 堀 経夫訳『経済学および課税の原理』, 雄松堂書店, 1972年。
- Schumpeter, J. A. (1954): *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press. 東畑精一訳『経済分析の歴史』(全7冊), 岩波書店, 1955–62年。
- Smith, A. (1976; 1759): *The Theory of Moral Sentiments*, (eds.) D. D. Raphael and A. L. Macfie, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. 高 哲男訳『道徳感情論』, 講談社学術文庫, 2013年。
- (1976; 1776): *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, (eds.) R. H. Campbell and A. S. Skinner, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年。
- Sylos-Labini, P. (1976): 'Competition: The Product Markets,' in T. Wilson and A. S. Skinner (eds.) *The Market and the State: Essays in Honour of Adam Smith*, Oxford: Clarendon Press, pp. 200–232.